

# キルステン・バイスヴェンガー教授を 偲んで

関 徹 雄

本学設立の際、ドイツ語学科に講義科目「ドイツの音楽」の設置認可に功勞のあった本邦ワグナー研究開拓の一人であった安藤熙教授が1974年末、逝去されて以来、「ドイツの音楽」専任教員が不在で、小生等が代講していたが、1990年頃から専任教員の必要性が高まり、1993年公募によって「ドイツ語会話」、「ドイツの音楽」担当の専任外国人講師としてバイスヴェンガーさんが採用、着任された。御主人の小林義武氏とともにゲッティンゲンのバッハ研究所の研究員で、お二人により多くの優れた業績を発表されているのは応募書類から分かり、ドイツ語学科での活躍が期待されたのであった。着任後は授業の傍らチェロの大家、ビルスマに師事されたことで、獨協オーケストラの定期演奏会で、チェロパートに出演するなど楽しく過されたようだったが、御主人の勤務する大学の京都に毎週、週末に向かう日程のためか1996年頃体調を崩されて短期間休職されることもあった。それにしてもバッハ研究は御主人とともに続けられ、1998年には Alfred Dürr 氏と御主人の小林義武さん編集の協力者として大著「バッハ作品目録」(Bach Werke Verzeichnis)を Breitkopf & Härtel 社から出版された。この大著の基礎となったバッハ研究の博士号は1990年にゲッティンゲン大学で取得されており、本学就任以前から殆んど毎年論文を発表されている。

助教授昇任の際には小生も審査員の一人であったが、テュービンゲン大学時代ドイツ文学も専攻したことから、研究分野がバッハを中心とした音楽史の領域を超えた文芸学、歴史学の方面にまで及んでいると判断できたのであった。

共に審査員であったヴィーノルト名誉教授からはバイスヴェンガー博士への „Laudatio“ (讃辞) が寄せられていた。小生の在職中、バイスヴェンガーゼミ出身の大学院生の指導を担当したが、ツェルター歌曲集の貴重な楽譜をドイツから取寄せていただき、現在も感謝しながら利用している。バイスヴェンガー御夫妻とは鈴木雅明氏指揮のバッハコレギウムの演奏会の度毎に出会い、演奏の印象や近況について語り合いましたが、御主人が2011年リンパ腫を患い、お二人にお会いする機会が少なくなりました。御主人は恢復され、お仕事を再開されたようでしたが、バッハコレギウムの演奏会に一人で来られたバイスヴェンガーさんから御主人が今度は白血病に罹ったと聞いて驚いたのでした。移植すれば恢復すると元気そうに語られたので安心していましたが、2012年の秋頃三度目の移植をすると聞き、移植は三回が限度ということを知っていたので、病院にお見舞いに伺った。無菌室の病室での面会で上衣を白衣に着換え、マスクをして短時間お話しすることができたが、かなりの重態と見え、お会いできて良かったと思えたのであった。この見舞いにたいしてバイスヴェンガーさんから御主人は喜んでいたというお礼のたよりをいただいたが、その後まもなく年を越し、2013年1月26日に小林義武さんは亡くなられた。小生のお悔みの手紙にたいしては、御主人は一年間の苦しみから解放されたが、多くの意図した仕事が成し遂げられないのは悲しいという返事をいただいた。2月に行われたバッハカンタータ全曲演奏を記念したバッハコレギウムのコンサートで指揮者鈴木雅明氏が演奏終了後、小林義武さんについて語られたことは2013年獨協ニュース5月号に寄稿しているが、その校正刷りが出た4月15日にバイスヴェンガーさんと学内であったとき、獨協のために研究と教育を続けるとのことでした。でも逗子から大学まで2時間半以上かかるので疲れると云われました。その丁度一か月後に自死されたのは驚きでした。葬儀は家族葬として横浜で行われ、学長、副学長、外国語学部長、ドイツ語学科所属の数名の教員、大学院の教え子とともに小生も出席させていただいた。アメリカ在住のバイスヴェンガーさんの妹御夫妻、小林義武さんの御兄弟が出席され、御令兄の小林敬明さんの「弟の愛情が強すぎて、妻のバイスヴェンガーさん呼び寄せてし

まった。」というお言葉には眞実味があふれ印象的であった。遺影にも対面させていただいたが、実にさわやかな雰囲気でした。

こうして世界的バッハ研究者の御夫妻を失ってしまったが、獨協大学ではバイスヴェンガーさんの研究と教育に大きな期待が寄せられていたのに果たせなくなり、誠に残念で、ここに心から御冥福を祈り上げ、追悼の文といたしたい。

この拙文を執筆中2月23日にバッハコレギウムのコンサートがあり、プログラムに滅多に演奏されることのないバッハと同時代のイタリアの作曲家フランチェスコ・バルトロメオ・コンティ(1681/82-1732)作曲のソプラノ・カンタータにたいして小林義武編による対訳が掲載されていたことを付加しておきたい。お二人のバッハ研究は今後とも生き続けることを改めて感じさせられている。

(2014年2月24日)